



地名の由来

「袋津」という地名は、文字通り袋のような地形の湾に臨んだ港だったから生まれたと言われてます(「ふるさとの地名亀田」よる)。亀田町史には「江戸時代のはじめに津、つまり船着場として人家も多少そなわり地形的にも袋のようになっていて、横越沢方面の陸路とも続いている地点といえ、現在の伊夜日子神社の前しかない」という記載があります。この「伊夜日子神社の前」には、かつて「美女池」と言われる水面がありました。



明治頃の伊夜日子社付近(明治27年更正図による)



絵図「亀田郷治水史古図」



寛永16年横越島絵図(原図:市内野野青木正昭氏所蔵)

袋津の歴史

500年以上、もしかしたら平安時代から続く歴史

「袋津」の名前はさまざまな資料の中に見ることができます。「中蒲原郡誌」には、「古老の伝ふる所によれば、幾野七兵衛なるもの大同年中(806~809年)之を開発し、梭垣(おさかき)村と称せしが上杉氏の時袋津村と改称せしにやいうといえど難も後世符合の説にして信を措くにたらず」とあります。また、亀田郷治水史古図「寛治六(注:1092年=平安時代)年ノ海津及び其后ノ大風ニヨル大変化ノ圖」には、「亀田郷の芦沼に存る第一砂丘列に唯一(袋津前名 梭垣)」という表記があります。これらは伝承を書いたもので、「府会の説」(=こじつけ)というように、確かなものとは言えない面もありますが、圓行寺(地図)開山一行が村にはいったのが1520年といえますから、少

なくともその頃には集落が確立していたと言えるでしょう。慶長17(1612)年の「新発田藩御蔵納同弘方帳」(亀田町史)には、「横越本村」「大淵村」「二本木村」等と並び「袋津村」の表記がありますが、亀田の他の地区の記載は見られないので、これ以前は袋津以外の亀田の地は、まだ村として成立していなかったと考えられます。さらに寛永16(1639)年の「横越島絵図」には、第一砂丘列上の地域の表記に「城山新田」「所島新田」「船戸山新田」のように、新しく開発されたという意味の「新田」が使われていますが、唯一「出雲様御分袋津村」だけは「村」の表記になっています。これらの資料から、袋津がこの地域の中でも特に古い歴史を持っているのがわかります。

梭垣 おさかき

袋津はドンぐリの里?

中世期以前(年以前)、袋津は「梭垣村」と呼ばれていました。「梭(おさ・ひ)」とは織り機に横糸を通す付属具のことで、「杼(ひ)」とも書きます。しかし、この当時の袋津で織織りが盛んだっただのかどうか定かではなく、「杼」という字は「どんぐり」とも読みますから、もしかしたらこれはどんぐりなる木のこともかもしれません。中世以前の袋津境界は、どんぐりなる木で垣根や砦を作っていた・・・そんな想像もできますね。



亀田東小学校の校章。梭3本と竹(笹)の葉を組み合わせたもの

はたごよう 機業のまち

憧れのアイドル「袋津織姫」

機業のまちとして栄えた袋津。全盛期には通りを歩いている機織機の音が聞こえたといえます。機織り工場で働く女性たちは「袋津織姫」と呼ばれ、近隣の若者の憧れの的でした。戦後は「細糸着尺地」を扱う機屋が隆盛し、昭和40年代の袋津には30軒ほどの「機屋」と、「燃糸」「染色」「整理」「仕上げ」といった分業を担う工場が中浦向・池の山地域を中心に集まっていた。しかし近年、繊維商品は徐々に中国製を中心としたアジアからの商品に押され、現在では袋津地区で機業関係を営む工場は数少なくなっています。



「袋津織姫」は亀田まじにも取われています

「迷路のまち 袋津を歩く」は、歴史のある「袋津」の魅力や、地域外の人々にもより地元の人々にもっともっと知ってもらいたいと考えて制作したものです。本紙では古くからの地名を表記してあります。古くからの地名にはそれぞれ意味があったりします。「浦向」や「宮浦」といった地名は本来の位置関係からすると「裏」の表記になりそうですが、「裏」だと印象が悪いため先人は「浦」をあえて使い伝え継がれています。「浦」という文字を使っていることで袋津の地域が、水路など水辺で潤っていた水郷であったことが容易に想像できます。また、「茶島」や「下里(さがり)」、「塚の山」といったすでに一部の人にしか使われていない地名もあります。市町村合併で新潟市となった現在、あらためてかつてのコミュニティーに立ち返り古くからの地名を大切にすることも感じました。袋津は歴史が深く、まちのつくりも個性的な「ヒューマンスケールのまち」です。さまざまな魅力に満ちた袋津が、これから先後世に渡って光り続け、地域に住む皆さんがまちに誇りを持ち続けられる事を願っています。ぜひ、本紙を手に袋津のまちを散策してみてください。きっと新しい魅力に出会えると思います。

制作にあたりご協力・ご尽力いただいた東小学校コミュニティ協議会委員の皆さん、そして取材に際して快く応じてくださった袋津住民の皆さんに感謝いたします。

発行日:2008年
協力:亀田郷土資料館 飯泉三村節司
編集:亀田学 伊藤純一
デザイン:オフィスカイ(上田浩子・石垣寛美)
発行:東小学校コミュニティ協議会

伊夜日子社

オバサの信心深さが袋津にお礼をもたらす

明治35(1902)年発行の『伊夜日子神社之景』図(袋津:伏見氏所蔵)では、「創立当時の次第は記録の微するものなきを以て、されども古来よりの口碑(言い伝え)によると」として伊夜日子神社の創始の言い伝えを記していますが、まちに伝わる伝承にはこんな話があります。袋津村一番の旧家とされる幾野家(現在は在村していません)のオバサが、毎月弥彦神社に参詣していました。遠いところをやってくるオバサを気の毒に思った神社が、自分の屋敷に祀るようにとお礼を渡し、喜んだオバサはその通りにお堂を建てます。このお堂がオバコ堂で、伊夜日子神社の始まりだという物語です。伊夜日子神社は天香具山命を祀った神社ですが、天照皇大神と、池の山の旧家に祀られていた建御名方命が合祀され、現在ではこの三神が祀られています。天保4(1833)年旧暦6月3日に拝殿が上棟され、これを祝った祭礼が7月14・15日の袋津祭りとなりました。本殿は明治25(1892)年10月に袋津の名工・宮大工前田左五郎により新築され、その記念碑は拝殿の裏で見ることができます。拝殿は昭和47(1972)年8月3日に大淵の宮大工・佐藤七蔵によって建て替えられ、社務所も新築されました。鳥居は広島島の厳島神社と同じ、四脚の稚児柱を持つ两部鳥居です。



上左:天保4年上棟時の棟札(伊夜日子神社所有) 上右:伊夜日子神社の鳥居。四脚の稚児柱がある。神社の社格は国幣中社



袋津祭り

灯籠押し

例大祭のメインイベント

袋津は7つの集落に分けられます。祭りで登場する灯籠は、それぞれの地域は独自に持っているものです。祭りの7月14日の朝、奉納された灯籠は午後各集落で巡行し、夜に宮登りが行われます。本来灯籠宮登りは宵宮の晩のみ行われていましたが、現在は14、15日両日行われ、現在は15日の晩が灯籠押しのメインとなっています。各集落が宮登りの道中出会った他の集落の灯籠と力比べをする灯籠押しづつけあいのステージと、クライマックスの宮登りは毎年多くの観客で賑わっています。また、宮登りに先駆けて奉納される山の下山楽組の神楽も人気があります。

- 一番組(宮前(27)・向(28)・宮浦(29))
お宮付近の灯籠組で花飾りは「梅に牡丹」。かつては三王山(現亀田中学校付近。標高6mくらいの小高い砂丘だった)の麓で山を迎えるということから「向」と名が付いたともいわれる。袋津で古くから開発された地域で、正福寺は昔の三王山麓にあったと伝えられる。
- 二番組(岡山(31))
かつての「茨島」(圓行寺付近の地名)「下里(さがり)小路(中浦向きに向かう小路)」の一部を含む灯籠組で、花飾りは「牡丹」。バス通りだったメインストリートが中央を貫く。圓行寺の門前地として、商店や古い家が並ぶ。
- 三番組(砂岡(33))
旧家、庄屋が並ぶ地域の灯籠組で花飾りは「桜に牡丹」。古くから本家弥彦灯籠祭りにも参加している。独自の灯籠保存会を有し、毎年宮登りにはこだわり、息のあった勇姿を見せつける。
- 四番組(池の山(34))
かつての「塚の山」「向山下」までを含む地域の灯籠組。本来の花飾りは「桜」のみだったが、近年は「桜に牡丹」を飾る。灯籠を中断していた時期もあったが、昭和53(1978)年復活。近年は本家弥彦灯籠祭りにも参加を続ける。15日のみ宮登りを行う。
- 角力組(中浦向(30))
中浦向とは浦向と中向を合わせた呼び名で、かつては祭りの境内で相撲興行を取り仕切っていた。花飾りは「牡丹に蝶」。相撲興行を取り仕切るだけの旦那衆が多かった地区で、かつての機屋・旧家のお屋敷が連なる。相撲興行は戦後一度衰え行われたがその後は行われず、昭和54年頃灯籠組として参加。平成8年30区の灯籠保存会が発足し伝統の継承に努める。15日のみ宮登りを行う。
- 都町組(都町(26))
昔は一番組に属していたが、昭和34年頃都町組として独立、当初は榊御輿だった。花飾りは「梅に牡丹」。JR信越線で小学校区が割れコミュニティが分かれたが、袋津の西の商店街として栄えた地域。かつてのバス通りには「都座」という劇場もあった。14日のみ宮登りを行う。
- 神楽組(山の下(32))
神楽舞を奉納する組。昔の袋津の中の新聞地で、新しく身を持った者が多いため灯籠組よりも神楽舞を遣んだと古老は言い伝えるが定かではない。14日の晩と15日の日中神楽舞を奉納する。

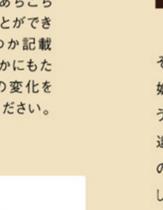


迷路のまち 袋津を歩く



見どころポイント

- 1 袋津物産だれ桜
旧国道49号線沿いの袋津バス停前の橋田医院には、三春から移樹したという立派なだれ桜があります。医院の待合室の人の目を楽しませてくれるのはもちろん、通行人が足を止め、この桜目当てで訪れたカメラマンがシャッターを切っています。
- 2 片山家のヤブツバキ
みそと米を商う片山商店 (http://www.e-kome-miso.com/miso.html) のお庭には、樹齢300年とも470年とも言われているツバキがあります。幹まわり146cm、大きく広げた枝に、毎年見事な花を咲かせています。市指定文化財(天然記念物)。
- 3 後藤家のうめ
幹まわり230cm、樹高7m推定樹齢210年のうめ(あんず:バラ科)です。
- 4 植村家のこうやまき
幹まわり175cm、樹高10.5m、推定樹齢200年のこうやまき(こうやまき科)。まっすぐに伸びた姿を生け垣ごしにあおぎ見ることができます。
- 5 EMU-st(エム・スタジオ)
様々なアート作品を鑑賞できるギャラリーで、各種機材を揃えている版画工房でもあります。会員になると機材を使うことができます。詳しくはTEL.025-383-1026皆川さんまで。



新亀田八景(平成の亀田八景)の第1番が「水道タンクの朝焼け」。この上水道高架水塔(水道タンク)は、2003年国登録有形文化財に指定されています。

バスが通っていた、かつてのメインストリート
東は伊夜日子社の参道前・美女池跡から岡山の商店街を通り抜け、山の下から旧49号線へ。西は同じく美女池跡から都町商店街を通り、旧49号線へ。この通り沿いには商店が建ち並び、伊夜日子神社前と圓行寺前を結ぶ袋津のメインストリートで、かつてのバス通りでした。袋津祭りの時、各集落の灯籠が登ってくる参道でもあり、各所で灯籠のぶつけあいを見ることが出来ます。

角力組 <中浦向>30区
四番組 <池の山>34区
三番組 <砂岡>33区
二番組 <岡山>31区
神楽組 <山の下>32区
一番組 <宮前>28区
都町組 <向>27区

見どころポイント

- 1 袋津物産だれ桜
- 2 片山家のヤブツバキ
- 3 後藤家のうめ
- 4 植村家のこうやまき
- 5 EMU-st(エム・スタジオ)

見どころポイント

- 1 袋津物産だれ桜
- 2 片山家のヤブツバキ
- 3 後藤家のうめ
- 4 植村家のこうやまき
- 5 EMU-st(エム・スタジオ)



思わず足を踏み入れたくなる、迷い込んでしまいたくなる。そんな小路に出会えるのが袋津散策の醍醐味です。だけどご用心。思いつきりカーブしていたり高低差があったり、袋津の小路は3D構造。本気で迷子になってしまうかもしれません。もちろん、そこがまた魅力でもあるんですが。

高低差のある地形
高低差のある地形は起伏に溢れています。地形なりに生まれた通りや路地は、タクシーの運転手さんも手こずるダイナミックな迷路。坂あり、カーブあり、クランクあり、細い小路の先にはいったい何があるのか？ 車ではなく人のサイズ(ヒューマンスケール)でできている小路は、つつひきこまれてしまう魅力満載の三次元空間なのです。

女性の雇用を最優先に考え
市民により設立された保育園
亀田地区は農家の副業として発達した機械織りの盛んな地域です。明治30年代の機械織り導入以降生産高は急上昇し、機械が集中する袋津地区では女性が安心して働くための保育施設増設の必要性が強く叫ばれるようになりました。その要望を受け、機械経営者と地域有識者によって保育園設立に向けた「おさ垣会」が発足、昭和39(1964)年活動を開始します。同時に開始した募金活動によって関係地域の全戸から善意の浄財が集められ、同年6月1日、定員60名の無認可保育園「袋津保育園」の自主開設が実現しました。袋津保育園は働く女性を必要とした地域産業会、地域の発展を願う地元住民の思いにより、市民により設立された私立保育園です。当初は旧袋津小学校跡地を借りての開園でした。昭和39(1964)年6月16日の新潟地震(M7.9)で被災しましたが、県内外からの温かい支援により昭和40(1965)年3月19日再建・竣工、4月には認可施設として開園しました。その後再び建て替え、現在の建物は昭和61(1986)年3月に竣工した鉄筋コンクリート造2階建ての園舎です。

490年の歴史を持つお寺
浄土真宗 大谷派「圓行寺」
永正17(1520)年石川県月津村(現小松市)より移って来た蓮如上人の直弟子だった僧侶が、幾野家の世話で草庵を結んだのが始まりで、現在の住職は18世です。当時既に袋津には布教僧がいて、過去には寺院が他に2カ寺あった時代もあります(西堀の正福寺もかつては袋津にあった)が、現在は袋津唯一の寺院です。本堂は幕末弘化3(1846)年に建立(砂岡の宮大工前田佐五郎築で釘は一本も使われてない)、火災や第二室戸台風(1961)で被害を受けて屋根を茅葺きから瓦葺きへ改修したものの、柱梁などの主構造は建立当時のまま残されています。本尊である阿彌陀如来像も開山当時からのもので、昭和58(1983)年、前任職の時代に金箔装飾を施しました。平成15(2003)年に屋根の大改修工事で瓦を葺き替え、その時下ろした古瓦で作った記念のオブジェが、境内と中庭に設置してあります。



都町組 <向>27区



角力組 <中浦向>30区



四番組 <池の山>34区



三番組 <砂岡>33区



二番組 <岡山>31区



神楽組 <山の下>32区



一番組 <宮前>28区



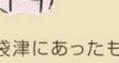
袋津の池

美女池
村中池

袋津のロミオとジュリエット

<美女池伝説>

昔、池の辺りの庄屋様の家に美男の誉れ高い一人息子がいました。そしてこの池の対岸の山王山に住む百姓家に、これた美人の噂高い娘がおりました。二人の間にはいつしか恋が芽生え、池を挟んで愛あう日が続きましたが、一方は庄屋様で片方は一介の水呑百姓、身分の違いや家柄へのこだわりから両家の親はとうにも許してくれません。悶々の日を送るうちに、庄屋の息子の方は他からの縁談が着々と進んでいきました。それを伝えた娘は深く哀しみ、生きる望みをなくしてこの池に身を投げてしまいました。村人は娘を哀れに思い、以来この池を「美女池」と呼ぶようになったそうです。



袋津にあったもうひとつの池 <村中池の龍>

村の中央、現在の池の山集会所と東区民会館の位置には、龍を主とする池がありました。ところがこの主が夜な夜な村には出ては悪さをするので、困った村人が静まるよう稲葉山の神社に沈黙を祈願奉納したと言われ、また稲葉山神社の記録にも残されているといひます。この池は北は亀田、稲葉から南は砂岡、川根谷地へ続く水路の中間でもあったので、「村中池」と呼ばれていた。

村中池跡 ●D4

袋津の金魚売り

お祭りでは売っている金魚は袋津産?
袋津にはかつて多くの金魚屋さんがありました。日本での金魚の歴史は古く、明和年間(1764~1771年)にはすでに金魚を觀賞することが大衆化していたといわれています。昭和40年代には15~6軒の金魚屋があり、池を持つ店も6軒ありましたが、現在は3軒、池を持つ店は2軒のみです。なぜ袋津地区に金魚屋が多かったのか定かではありませんが、村内にきれいな水路が入り込んでいたからではないかと考えられています。ちなみに、袋津はかつてドジョウの大産地で、亀田からはドジョウを満載した貨車「ドジョウ列車」が出るほどでした。



伏見養魚場の池

旧袋津郵便局

ノスタルジックな木造建築は築75年

袋津郵便局は明治36(1903)年に三等郵便局として開局しました。木造家屋の旧局舎は昭和5(1930)年築、築75年、当時全国的に様式を類似させた郵便局建築で、和洋折衷の建物です。現在は使用しておらず、普段は開館もしていませんが、今後は町歩き等のイベント時に見学ができるようになります。大正期に使っていた赤いポストは、現在郷土資料館前に移設し保存されています。旧袋津郵便局(現在の郵便局の隣) ●D5



旧袋津郵便局

490年の歴史を持つお寺

浄土真宗 大谷派「圓行寺」

永正17(1520)年石川県月津村(現小松市)より移って来た蓮如上人の直弟子だった僧侶が、幾野家の世話で草庵を結んだのが始まりで、現在の住職は18世です。当時既に袋津には布教僧がいて、過去には寺院が他に2カ寺あった時代もあります(西堀の正福寺もかつては袋津にあった)が、現在は袋津唯一の寺院です。本堂は幕末弘化3(1846)年に建立(砂岡の宮大工前田佐五郎築で釘は一本も使われてない)、火災や第二室戸台風(1961)で被害を受けて屋根を茅葺きから瓦葺きへ改修したものの、柱梁などの主構造は建立当時のまま残されています。本尊である阿彌陀如来像も開山当時からのもので、昭和58(1983)年、前任職の時代に金箔装飾を施しました。平成15(2003)年に屋根の大改修工事で瓦を葺き替え、その時下ろした古瓦で作った記念のオブジェが、境内と中庭に設置してあります。

圓行寺 ●E6



圓行寺の瓦オブジェ



圓行寺本堂